
追 悼

近藤喜代太郎先生を悼む

関東労災病院名誉院長

柳澤 信夫

神経学、公衆衛生学の領域で、国際的、国内的に多くの功績をあげられた近藤喜代太郎先生は、平成 20(2008)年 9 月 30 日ご逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。

近藤先生は 1933 年、静岡市に生まれ、1959 年東京大学医学部医学科を卒業され、インターンの後、冲中重雄先生が主宰される東大医学部第三内科に入局されました。神経学の研究室に所属されて、1965 年新潟大学に神経内科が設立され、椿 忠雄先生が初代教授として赴任されたのに伴い、新潟大学に転勤され、講師、次いで助教授として神経内科学教室の設立に努力されました。

1965 年は、新潟県阿賀野川流域で有機水銀中毒が発見された年であり、臨床、特に地域医療における神経内科の重要性が社会的にアピールされました。そしてスモンの疫学調査を教訓とした、有機水銀中毒の徹底した疫学調査を実施して、「新潟水俣病」の原因解明がなされましたが、椿教授のご指導のもと、実地調査を指揮し、患者の認定の責任者となったのが近藤先生でした。

1981 年、椿教授が東京都立神経病院の創設に際して、初代病院長として赴任されたのに伴い、隣接する東京都立神経科学総合研究所疫学研究室に所属され、先生の業績の中心となる神経疫学の研究に本格的に没頭されることになりました。

1984 年には北海道大学医学部公衆衛生学教室の主任教授として転勤され、この頃から研究・教育活動の領域は国際舞台に移されました。世界神経学連合(WFN)の実質的な国際研究連絡組織である各種研究委員会の中で、大変重要な位置を占める疫学委員会の委員長(4 年任期)を 1994 年から勤められました。この間に世界保健

機関(WHO)にも神経疫学の専門家として参加され、日本の神経内科の活動や位置づけについての詳しいレポートも出版されました。

近藤先生は、北海道大学を定年で退官された後、放送大学の教授を長く勤められ、洒脱な風貌となめらかな語り口は、時々テレビで拝見することができました。

近藤先生は直截にものを言われる方でした。公衆衛生の専門家として、また疫学者として、個人的にいろいろ教えていただいたことを思い出します。ニューデリーで世界神経学会総会があった折、私はインドは初めてであり、学会の後、スリナガルという北インドに行くことを計画して、水のことをうかがいました。近藤先生は、「インドでは上水道と下水道の区別はないと思えばよい」という明快な答えをくださいました。

また近藤先生は、鉄道の切符の蒐集マニアとして有名でした。医師にはどういう訳か切手や蝶、その他各種のコレクターが多いのですが、鉄道切符はユニークなコレクションだったと思われます。詳細は覚えていませんが、いかに切符を駅で渡さずにすむか、など当時難しかった切符の蒐集法を夢中で話されていたことを記憶しています。

またうかがうところによりますと、大変な愛妻家であり、北海道ではオフロードのバギーを運転するのが趣味であったとのことでした。

私のまなこには、晩年の先生が放送大学のテレビで、独特の語り口で講義をされた様子が浮かんできます。わが国と世界の神経学、公衆衛生学にユニークな足跡を残された方を失いました。

謹んでご冥福を祈りあげます。



近藤喜代太郎先生ご略歴・ご業績

■ご略歴

1933 年 静岡市に生まれる
 1959 年 東京大学医学部医学科卒業
 1960 年 東京大学医学部第三内科入局
 1963 年 東京大学医学部助手
 1965 年 新潟大学医学部附属病院神経内科講師
 1969～1971 年 ミシガン大学，メイヨークリニック
 留学
 1977 年 新潟大学脳研究所神経内科助教授
 1981 年 東京都神経科学総合研究所疫学研究室，
 臨床神経学研究部長
 1984 年 北海道大学医学部公衆衛生学教授
 1997 年 放送大学教養学部教授

■ご活動・ご業績

新潟水俣病についての臨床・研究，先天異常モニタリングの運営・対策，わが国の神経難病の実態・危険要因・遺伝形式の解明，老年期認知症対策として「脳活性化訓練」，WHO と共同の「神経学と公衆衛生計画」の立案，生活習慣病などの分子遺伝学の予防医学への応用など。

1993～95 年 欧州連合 (EU) ヤコブ病に関する疫学委員会委員

1994 年 世界神経学会・疫学委員会委員長
 1996 年 日本人類遺伝学会第 41 回大会会長
 1996 年 第 48 回北海道公衆衛生学会会長